

図画工作科

野 畠 慎 二
中 川 佑 紀

1 図画工作科における「よりよい未来を志向する子」

新学習指導要領では、教科における見方・考え方を働かせることが深い学びを実現するために重要とされている。図画工作科では造形的な見方・考え方を「感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点でとらえ、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」と定義している。また、「自分のイメージとは、児童が心の中につくりだす像や全体的な感じ、又は、心に思い浮かべる情景や姿などのことである」と、書かれている。このように、表現及び鑑賞活動を通して造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる資質・能力を育成することをめざしている。

そこで、本校の図画工作科では、自分のイメージをもちながら、思いとこだわりをもって表現できることをめざす。思いとは、表そうとすることや表したいことである。こだわりとは、思いを形や色で表すための根拠となるものである。また、教師や友達などの他者とのかかわり合いや自己と作品とのかかわり合いを大切にしていく。こうしたかかわり合いを受け、思いに合うこだわりを更新できる場や、十分に試行錯誤できる場を設定する。そうすることで、子どもは、これまでとは異なる新たな意味や価値に気付き、自己や自分の作品と向き合うことにより自分の見方・考え方を深め、表現を追求し、感性を育んでいく。

以上のことから、図画工作科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・自分のイメージを広げ 思いやこだわりをもち 表現し続ける子
- ・かかわり合う中で 新たな意味や価値に気付き よりよい表現を追求する子
- ・今までの学びを生かし これからの実生活へとつなげる子

2 図画工作科における未来へ生かす決める授業デザイン

図画工作科における決める授業では、題材と出会い、思いやこだわりをもって表現し、ふり返ることを大切にしていく。導入では、題材や主題と出会ったり、作例や作家の作品に実際に触れたり、作品に込められた思いを聞いたりすることで、自分のこととしてとらえやすくしていく。

題材との出会いから自分の思いをもち、どんな形や色で表現するか試行錯誤する。形や色などで表現していくうちに、よりよい形や色などを追求し始めていく。しかし、子どもはつまずいたり、活動が停滞したりすることがある。そこで、かかわり合うことで、新たな意味や価値に気付き、より思いに合った形や色を決めることができるようにしていく。

今までの学びをこれからの実生活へとつなげるために、授業の中で思考や表現の過程を蓄積し、客観的にとらえられるようにする。その時間で考えたことや気付いたことをふり返ることで、新たな目で自分の作品を見つめ直したり、反映したりすることができると考える。この経験を積み重ねることで、自分の作品を客観的にとらえ、更新していくことができるであろう。

そして、題材終末時には、省察を行う。この題材で習得した知識・技能をワークシートに書きためていく。これまで書きためてきたものを見返すことで、自己の成長を実感することにつながるであろう。さらに、この題材での学びを、これからの題材や生活の中でどのように生かすことができるかについても同時に考えていく。そうすることで、新たな課題と出会ったときに、過去の活動時の思いや表現などを思い起こし、これからの実生活に生かしていくことができる。と考える。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

形や色にこだわりをもち表現するためには、自分の思いをもつことが不可欠である。教師が子どもに思いをもたせるために、自分のこととしてとらえられるような題材や主題、材料を吟味する。そして、目的意識をもち、イメージを広げられるように題材や主題を提示する。また、視覚や聴覚だけでなく、材料の手触りなどの触覚も含め五感を刺激する提示をすることで、「おもしろそう」「やってみたい」と、思うことができるようにする。

さらに、鑑賞から発想のしかたや表現方法を考えさせたり、作家の作品に出会わせたりして、自分の思いをもつことができるようにする。

他にも、表現したいものに広げていくために、文字やキーワードからイメージをもたせることができるようにする。そうすることで、子どもは自分の生活と結び付けたり、ふり返ったりして言語化し、表したいことを思いつくであろう。

次に、題材と出会った子どもが自分の思いをもつために、試すことができるような時間を確保する。小さめの紙などの材料を準備しておき、納得がいくまで試す活動をくり返すことができるようにする。そうすることで、自信をもって作品づくりに取りかかることができると考えている。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもは、造形活動の中で自分の思いを形や色にこだわって表現していくうちに、よりよい表現を追求していく。子どもはつまずいたり、活動が停滞したりすることがあるため、かかわり合いの場を設定する。

かかわり合いの中で自分の思いや表現方法を決めることができるように、ヒントコーナーや資料を工夫する。そうすることで、そこに集まる友達との対話からかかわり合いがうまれる。また、意図的、即応的にかかわり合いの場も設定していく。イメージを深めたり思いを明確化したりするためのペア・グループでのかかわり合いや、イメージを広げたり困り感を解消したりするための全体・フリーでのかかわり合いなどの形態についても吟味していく。こうしたかかわり合いの後に、得たことを全体へと広げていく。

このようなかかわり合いによって得た新たな意味や価値を、自分の作品に反映させることができる時間を確保する。かかわり合うことと表現することをくり返すことで、自分の思いがより具体的になり、形や色のこだわりも深まり、よりよい表現を追求していくことにつながっていく。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

自分の思いやこだわりをもって表現するために、アートブックを活用する。このアートブックには、授業の中での思考や表現の過程を、付箋やワークシートに記録し蓄積する。蓄積したものを見返す中で、客観的にとらえることができ、新たな意味や価値をふり返ることができる。そして、自分の思い、作品の形や色へのこだわりに対する変容、自分の成長に気付くことができる。さらに、実生活を想起し、自分の思いと結び付けて考えることで、形や色へとつながると考えている。

また、題材終末時には、省察を行う。この題材で習得したことをワークシートに書きためていく。これまで書きためてきたものを見返すことで、自己の成長を実感することにつながると考えている。さらに、この学びを生かし、これからの題材や学年、将来の実生活にどのように生かせるかも考えて書き足していく。このような省察を通して考えていく経験から、実生活の中でも生かし、実生活を豊かにすることができると考えている。